

第3回 講義

「子育て支援で街が変わる」

NPO法人子育て支援のNPOまめっこ 名誉顧問 丸山 政子 氏

1 活動のきっかけ

自身の育てが一段落後、地域の生涯学習施設で「子供の発達、子育て、女性の生き方、今の社会の在り方・問題」について10年ほど学び、パートで保育園に10年間勤務した。



その中で、「子供に男女がいるのに、子育てには、なぜ女性の視点しか入らないのか」、「保育園はとても大切な場所であるのに、女性だけの職場となっているのはおかしい」、「女性の社会的自立は大切である」と思うようになった。

親子教室を保育士とともに実施している中で、「まめっこ」という団体を引き受けることになり、2000年にNPO法人を立ち上げた。その後、「親子の広場」の必要性を強く感じ、2003年に「つどいの広場『遊モア（ゆうもあ）』」を商店街の中に開設した。

国は、1990年合計特殊出生率1.57ショックから、「新エンゼルプラン」といった働く男女に向けた施策を実施してきたが、合計特殊出生率は、現在1.43にまで落ち込んでいる。そこで、2010年、国は「子ども・子育てビジョン」を策定し、子供に焦点を当てた政策に変更した。そこでは「地域子育て支援拠点」を中学校区に一つ設置することとされた。

「子供に関する事業を実施し、地域の中で働き、地域が良くなり、人がつながっていく」という循環をつくっていくことができると考え、「地域子育て支援拠点」事業に手を挙げ、実施している。

2 子育て環境の現状

現在の子育て中の親が抱える課題の背景には、①「自分が親になるまで赤ちゃんに触れ合ったことがない」、②「出産後うつなどを理由に命に関わる虐待が発生している」、③「ネットなどの情報が氾濫している」、④「子育て世代は少数派である」、⑤「核家族化により母親一人が育児を担っている」、⑥「第一子の出産で7割が退職」、⑦「孤立感や疎外感をもつ家庭での育児」等が挙げられる。

3 アウェイ育児からホーム育児へ

NPO法人子育てひろば全国連絡協議会の調査によれば、7割を超える母親が、自分の育った市町村以外で子育て（アウェイ育児）をしており、その内、7割を超える母親は「近所に子供を預かってくれる人がいない」と回答している。また、地域子育て支援拠点を利用した効果として、「子育てしている親と知り会えたこと」、「子育てでつらいのは自分だけではないと気付いたこと」と回答する割合が高い。

4 支援者の役割

支援者の役割は、利用者を温かく迎え、身近な相談相手となり、利用者同士をつなぎ、利用者と地域をつなぐことである。親を他者や地域とつなぐことは、子供に対する虐待が減少することにつながると考えている。

支援者の心構えとしては、①「顔の見える関係づくりをすること」、②「当事者の話を聞き、自分は何ができるのかを考えること」、③「新鮮な地域の情報を常にもち、提供すること」等がある。

5 子育て支援で街が変わる

人口減少により、地域のスーパー等は今後潰れ、パート従業員は職を失うことが予想される。また、自らや家族が病気になり、介護が必要になる可能性もある。子供の貧困とは言い換えれば、女性の貧困である。それを防ぐためには、女性が地域で働ける場をつくっていくことが大切である。職場において、必要とされる様々な資格を取得することで時給が変わる。女性が変われば、暮らす地域も変わることにつながるのである。

- 地域子育て支援拠点の役割は、①親子の交流促進、②子育てに関する相談援助の実施、③地域の子育て関連情報の提供、④子育てや子育て支援に関する講習会である。
- 「あおぞらひろば」の目的は、身近な公園で「子育て広場」を行うことで地域の方に知っていただけることと、子育て中の親子が公園で遊ぶ中で親子のつながりができることである。
- 「家族の絆レストラン」は、企業や学生ボランティア等と協働し、パパにも子育てと料理の楽しさを感じてもらおう。相互子育て体験や夫婦だけの時間をもつことで離婚率を下げることも目的としている。
- 愛知学院大学地域連携センターと協働し、「親子のための防災講座」を実施し、災害への備えを知るきっかけとしている。